リレー連載

「いじめ」に思う

―ドーナッツと合唱コンクール　2／3―

吉成　タダシ（ストーリーライター）

ピンチをチャンスにしたい

「人間て『バクダン』そのものだよね。ちょっと操作を間違ったら、いろんな形で『バクハツ』するもんね」とドキッとする言葉がつづられた生活ノートは、次のように続いていました。

「でも、『バクダン』は配線を変えて、安全なようにすることもできる…と思う。だから『バクダン』そのものの人間も変わることができるんだよ。私もかなり自分で変わったと思う。私の配線を変えてくれるのは、私にとって大切な友だちのような気がする。でもまだまだ自分の嫌なところがある。そこは自分で変えないとダメだって思っている。クラスのみんなが、自分や友だちのあまり良いとは言えないところを見つけて、配線し直さないとダメなような気がする。私は絶対に『true friends』になれると思う。

そう思いたいだけかもしれないけど、でも何かつらいことがあったら思い浮かべる言葉がある。一つは『不要なものなんてこの世に生まれてこない。みんな必要だからここにいる』。もう一つは『神様はその人が越えられる峠しか用意していない』。二つとも小学生の時に知った言葉。『神様は…』は、去年だったかな、離任式の時にある先生が言っていた。必要だから、このクラスのメンバーで、私たちは乗り越えられる。でも私たち次第。今日はみんなで団結するはずが、バラバラになってしまう結果で、涙も怒りも全部あったけど、今日の出来事を『後悔』の形ではない形で記憶に残せるようにしたい。『ピンチはチャンス』ってこのことかも。今はピンチだけど、みんなが分かり合えるチャンス。違うかなぁ…?明日にならないと分かんないけど、『tomorrow』は「明るいday」だから。何度日が落ちても、明日は光に満ちている」

「みんなに…」と登校してきたアツミ

職員室で生活ノートをむさぼるように読んでいた私は、ふと背後に人の気配を感じました。「先生…」と呼ぶ声に振り返ってみると、そこにはアツミが立っていました。不安な気持ちでいっぱいだっただけに、アツミの顔を見た時、驚きとうれしさと、「よく来た!」という気持ちが一瞬にわき起こり、私はつい、ホロリとしてしまいました。「よく来た、本当によく来た…」胸がいっぱいの中、彼女は次に、意外な一言を発したのです。

「みんなにドーナッツ作って来たんですけど…」「えっ?どうして?」慌てて問い返す私に、「途中でいなくなったりして、みんなに迷惑かけたなと思って…」「そんなの、いつ作ったの?」「昨日の晩」「何時?」「三時ぐらい」ますます驚く言葉がつづきました。

「三時って、今朝じゃないか」「うん。お母さんに起きてもらって、材料買いに行って、一緒に作ってもらった」「じゃあ寝てないんじゃない?」、そんな私の問いかけなど意味がないかのように、アツミは、聞いてきました。

「うん…。いつみんなに食べてもらえる?」「じゃあ…四時間目に食べてもらおうか?それでその時に、みんなにいろんなこと話してみようよ。なっ!」「うん!」

優勝なんてどうでもいい

遅れて登校してきたアツミを、クラスは自然に受け容れました。ただただ自然に受け容れ、四時間目は、アツミからの言葉ではじまりました。

「昨日はごめんね。ドーナッツ作って来たんだけど、みんな食べてくれる?」

みんなに一つずつ配っていくアツミの姿。そんなアツミにお礼の言葉を返しながら、ドーナッツをつまんでいくクラスのみんなの姿。それに重なる、みんなからのメッセージ。

「ドーナッツありがとう」「明日は優勝しようね」「うん…優勝もいいんだけど、私ね、もう優勝なんてどうでもよくなった。みんなが仲良く揃って歌えたら、もうそれでいい」

「優勝なんてどうでもいい」ドラマやマンガの中でドラマチックに使われることがありますが、このときばかりは、みんなが心の底からそう思えた気がしました。要は、みんなが揃って、心の底からの歌声が出せるかどうか。それさえあれば、何も要らない。それは、クラス全員の共通した思いとなっていきました。

つまり三年A組にとって、合唱コンクールはもうすでに大成功となっていたのでした。その日、生徒たちは、安心した面もちで家路へとついていきました。

ドラマが現実に

いよいよ合唱コンクール当日。二年、一年と進んでいき、とうとう三年生の出番となりました。他のクラスの見事な合唱。合唱だけでなく、凝らされていた工夫も目を見張るばかりでした。いずれのクラスも、「さすが三年生!」といった出来映えに、会場全体があっけにとられるほどでした。

そして、いよいよ全学年、全学級の最後を飾る、三年A組全員揃っての合唱です。みんなが力の限りの声を張りあげます。文字通り、クラス目標と同じ曲名である「和」の学級旗を持って歌う子。ピアノを弾きながら懸命に歌う子。身体をスイングさせながら真摯に歌う子。本当にすべての子どもが輝いた瞬間でした。歌い終わった生徒たちは、それぞれの全力を出しきったという笑顔で満ち溢れていました。

そして閉会式。「優勝すればいいなー」といったくらいの軽い気持ちの中、三年A組は、優勝してしまったのです。

そんなドラマのような事実を実現してしまった子どもたちの生活ノートには、私がかみしめなければならない言葉が切々とつづられていました。

（つづく）

イラスト　中島　亜唯